

ラスト・プロポーズ

## 第一章 嫌われ者が思うには

「おい、いい加減にしるよ！ この仕事舐めてんのか？」

凄味のある低い声がフロアに響く。眼前の男に、今にも刺し殺されそうさだ。

「も、申し訳ございません！」

彼のデスクの横に立つ小椋珠美は、床に頭突きする勢いで頭を下げた。

「ふざけるな！ 謝って済む問題か！」

伊達俊成は、刃物より鋭い眼差しを向けながら怒鳴った。社内ナンバーワンのイケメンと称される伊達が凄むと、かなり迫力がある。彼の怒りオーラで、その辺のオフィス家具が一センチぐらい浮きそうさだ。

うわぁ……めっちゃ怒ってるよ……

珠美はもう泣きたかった。

伊達は二十九歳で、珠美は二十四歳だから、五歳しか歳の差はない。なのに、超優秀な伊達を前にすると珠美は、なにもできない幼稚園児みたいになってしまう。緊張して、委縮して、普段しないような初歩的なミスを連発してしまうのだ。

怒られて当然だ、と珠美は思う。

「送金額の桁数打ち間違えなんて、今どきバイトの学生でもやるかよ」

伊達は、吐き捨てるように言った。

「す、すみません」

頭を下げた珠美の視界に、椅子に座った彼のスーツに包まれたたくましい足が映る。伊達の身長は一八〇センチ以上ある。長い足がデスクの下で窮屈そうだ。シンプルなダークグレーのスーツとピカピカに磨かれた黒の革靴は、彼の真面目な人柄を表しているようで、珠美は好きだった。

「派遣だからって、テキトーにやってんのか？」

伊達の叱責は続く。

「そんなことは……」

「これが処理されたら、どうなったかわかってんのか？ 甚大な損害になるんだぞ！」

「申し訳ございません……」

「つたく、ガキの遊びじゃねえんだよ」

これ以上謝罪の言葉が思い浮かばず、珠美はひたすら恐縮する。反省の気持ちでいっぱいなのに、うまく表現できない。

「もういい」

伊達は、珠美が持っていた伝票をひたたくって自らのデスクへ放り投げ、こう続けた。

「これは二階堂君にフォローしてもらおう」

「すみません……」

伊達はもう、珠美など存在しないが如く、パソコンを睨んで英文メールを読みはじめている。

こんなときなのに珠美は、彼の精悍な横顔に見惚れてしまう。高い鼻梁に、彫りの深い整った顔立ち。どこか憂いのある黒い瞳に、切れ長の目元が、強く印象に残る。キリリとした薄い唇が、魅力的だ。あまりお洒落に興味がないらしく、伸びかけの黒髪はくしゃくしゃに乱れ、浅黒い肌は野性的で、抜群に格好よかった。

「どうしよう……」

立ち去るタイミングを逃し、でくのぼうみたく立ち尽くす。

「……なにボサツと突っ立ってんだよ？」

随分経ってから、伊達は険悪な顔で告げてきた。冷たすぎる視線に、ハートが叩き割られた心地がする。

「どげよ。邪魔だ」

伊達は冷酷に言い放つ。

「す、すみませんでした」

最後に深々と頭を下げ、踵を返す。フロア中から注がれる同情の眼差しが、痛い。

『またタマちゃん、伊達に怒られてるよ……』

『伊達の奴、タマちゃんにだけは容赦ないよなあ……』

そう噂する、社員たちの声が聞こえてきそうだ。『鉄鉱石の伊達俊成は派遣の小椋珠美を毛嫌い

している』というのが、月花商事の金属グループ鉄鉱石資源部の通説だった。

しかし、この会社の総合職の男性社員が、一般事務の女性社員にこれほど厳しくするのは珍しい。優しくしないと、事務処理が円滑に運ばないからだ。業務をサポートしてくれる者に嫌われれば、それだけ居心地も悪くなる。だから、伊達の珠美に対する当たりのキツさは際立っていた。まるで、珠美が会社を辞めようが構わない、と言わんばかりのあからさまな態度だ。

……辛い。

涙が溢れそうになり、唇を噛んで足を速める。

興味本位の視線をかわして化粧室に駆け込み、個室に入って鍵を締めた。

独りでしゃがんで、膝を抱える。

照明を反射した大理石調の床が、ゆがんでぼやけた。

悪いのは自分だと重々承知しているが、悲しみが込み上げる。おそらく同じミスを他の社員がしても、こんなに怒られることはない。同じ事務の二階堂が先日やらかした、荷為替手形の引き受け忘れのミスも、彼は咎めなかった。それどころかそのとき伊達が二階堂に『こんなミスぐらい、誰でもあるさ』と慰めていたのを見て、珠美はショックを受けた。

伊達は珠美のミスを決して見逃さないが、優しくフォローしてくれることなんてない。そのたびに舌鋒鋭くこき下ろされ、人格を否定され、軽蔑される。いくら鈍感な珠美でも、どうやら伊達は自分のことが特別嫌いなのだと、すぐにわかった。嫌いというレベルではなく、憎悪すら抱かれていると感じる。

——私、そこまでのことをした？

ここまで嫌われる理由が思い浮かばない。

それとも理由なんてないの？ 私の容姿が生理的に受け付けられないとか？ 性格がとにかく大嫌いか？ それならそれで、余計に凹む。

とはいえ、いつまでもこうしているわけにはいかない。涙を拭い、個室を出て、広々した洗面台の前に立った。化粧室はひんやりしていて、人氣がない。よく磨かれた鏡に映った自分が、じつとこちらを見返している。下がり気味の眉は臆病そうで、二重まぶたの瞳は涙で濡れていた。

珠美はよく人から『童顔で色白だね』と言われる。自分としてはもともと大人の、スタイリッシュな女性になりたいのに。奮発して、有名美容室でイメチェンした今の髪型は、シルエットの丸いショートボブだ。薦められるまま、色を明るいブラウンにし、前髪をぱつぱつと切ったが、やはり幼く見える。このイメチェンは失敗かもと、密かにがっかりしていた。それにメイクは苦手で、控え目なピンクのリップを塗るのが関の山なことも垢抜けない一因とわかっている。

派遣社員用の制服を、きっちり着込んだ姿は、我ながらいかにも真面目そうだ。月花商事に派遣されて二年と少し。ようやくルーティンワークがこなせるようになり、職場には慣れ、友達もできた。今のところ、特に問題はない。

伊達の前でミスを連発してしまうことと、彼にひどく嫌われている、ということ以外には。

——私、どうしてこんなに嫌われちゃったんだろう？

洗面台のへりを掴んでうつむいた珠美は、深いため息をこぼした。



「鉄鉱石の伊達ねえ」

一条リカは、肩にかかった巻き髪を掻き上げた。それから艶やかなネイルでアイスコーヒーのグラスにささったストローをぐにやりと曲げると、言葉が続ける。

「あの、いつつも眉間に皺寄せてる堅物ね。どー見ても、あんたのこと嫌ってるよね。完全に嫌ってるよね」

「うう……」

珠美はカフェテリアのテーブルに突っ伏した。

ここは地上三十階にある、月花商事自慢の社員食堂。月花商事本ビルは渋谷区神宮前の表参道沿いにあり、全面ガラス張りの窓から西側を覗くと、鬱蒼とした森が見渡せる。さらに南側には閑静な大学のキャンパスと都心のビル群が広がり、ロケーションは素晴らしかった。

時刻は十四時過ぎ。昼休みはとうに終わり、人はまばらだ。

珠美は午前中、トラブルの対応に追われていたため、昼食が今の時間になった。ブラジルの鉱山で事故があったとの連絡を受けたのである。現地時間で二十時前後の出来事だ。幸い怪我人も出ず、採掘重機の破損もなかった。しかし、輸出港から出る鉄鉱石運搬船が一日遅れるため、通知書を直したり関係会社へ連絡したりと、そこそこのインパクトはあった。いっぽう、人事部のリカは時間

の融通が利くので、いつも珠美に合わせて昼休みを取っている。

「あんた物好きだよねえ。あんなに嫌われてるのに、まだ好きなんでしょ？ 伊達のこと」

そう言っつてリカが首を傾げると、小粒なダイヤのピアスが、キラリと光る。

「と、とんでもない！ 好きだなんて！ 伊達さんはずっと憧れの人で、雲の上の人っていうか……その、好きとかじゃなくて」

珠美は慌てて言葉を並べ、ブンブンと手を振った。

リカと珠美は同じ時期に月花商事に派遣された、いわゆる同期である。入社説明会の際に、珠美はリカに声を掛けられ、帰りに二人でご飯を食べた。それ以来なんとなく気が合い、今は友達として仲良くしている。

「あんたが入社してあたしと初めてランチしたとき、目え輝かせてたもんね。伊達さんカッコイイ。超カッコイイって」

リカは珠美の本当の気持ちを見透かしたように言う。

「う、ううう」

「あんな堅物のどこがいーのかしら。すっごいつまんなそう。付き合っても常に怒られてさ。キスとかしたら、けしからんとか言われそう。武士かよ」

「伊達さんは仕事に対して一生懸命なだけだよ」

「一生懸命ねえ。まー仕事はできるわな」

リカは中空を睨みながら、言葉が続ける。

「伊達って帝都<sup>ていと</sup>大卒でまず財務部に配属、そこから生活資材部行って、ブリストルに駐在でしょ？  
それで帰国して花形部門の鉄鉱石資源部だもんね。超出世コースだと思っよ。うちの会社、やっぱり  
鉄鉱石がダントツだもん。歴史もあるしね」

「そうだよ、スーパーエリートだよ……」

「あと顔もイケメンだしね。しかも超がつく。マッチョで背高いし、凛々<sup>りんりん</sup>しくてワイルド系っつー  
か。うちの社内ナンバーワンイケメンと言えは繊維<sup>せんい</sup>アパレル部の西大路<sup>さいおおじ</sup>か、鉄鉱石の伊達か、どっ  
ちかでしょうね」

「伊達さんのほうが断然カッコイイよ！」

珠美は思わずムキになって言う。

「まー属性が違うわな。伊達は硬派で西大路は軟派<sup>なんぱ</sup>ってカンジ」

リカはグロスのたっぷり塗られた唇で、ストローを啜<sup>ふぶ</sup>える。それからアイスコーヒーを一口ごく  
りと飲むと、こう言った。

「けどさ、あたしら派遣は総合職の男になって、とてもじゃないけど相手にされないっしょ」

やっぱりそうなのかなあと、珠美は暗くなる。

それどころか私の場合、相手にされるとかされないとか以前の問題よね？ そもそもスタートラ  
インにも立ててないよね？

「私、どうしてこんなに嫌われちゃったんだろ？ 好きになってくれなくてもいいから、せめて嫌  
われてないレベルになりたい」

珠美は泣きたい気分で言った。

「嫌われる理由に心当たりはあるの？」

「失敗が多いからかも……」

「それくらいのこと、あんなに嫌われないでしょ。それにどっちかつつと、二階堂さんのほう  
が盛大なミスやらかしてるでしょ。第一キツく当たられはじめたのって、珠美が入社して割とすぐ  
だよな？」

珠美はしょんぼりしながらうなづく。

するとリカは考え込みながら言う。

「たぶん、理由なんてないんじゃない？」

「えっ？」

「これあたしの直感なんだけど、伊達ってなんかあると思う。つか、尋常<sup>じんじょう</sup>じゃないじゃん。伊達の、  
あんたの嫌い方って。大嫌いな人でも、大人のたしなみとしてあそこまであからさまな態度、取ら  
ないと思うんだよね、フツー」

「うんうん」

「伊達ってさ、どう言えばいいのかな、なんか逆に……あつ！ 見て！ 噂をすればホラ……」  
リカが指差す方向を見ると、ちょうど伊達と西大路が連れ立って、カフェテリアに入ってくるこ  
ころだった。

「来た来た。来やがったよ。わが社のツートップイケメンが。伊達俊成と、西大路頼嗣<sup>よりつぐ</sup>」

リカが声を潜めて言う。

「なんかあの二人ってよく一緒にいる気がする……」

「えっ。ヤダ、珠美知らないの？ 西大路と伊達って帝都大学時代から同期なんだよ。しかも学部も一緒」

「そうなの!?」

「西大路は初等部からで、伊達は高等部からだったかなあ、確か」

「リ、リカちゃん詳しいね」

「まあね。人事ですから、一応」

長身でスタイル抜群の男二人は、ハリウッドスターの如くきらびやかなオーラを放っている。食事をしていた社員たちも自然と手を止め、二人に目をやった。

華があるのは西大路さんのほうかも、と珠美は思う。繊維アパレル部はさまざまな衣料品を扱う、ファッション・アパレル部門の花形。彼は、そこにおいて他の追隨を許さない、圧倒的営業成績を誇る若手エースだ。我が社の繊維部門が、四大商社の中でトップなのは、彼の貢献が大きいと言われている。この男なしに繊維業界は語れない、とも。

「西大路って黙って立ってりゃ、死ぬほどイケメンなのにねえ」

リカは残念そうに言う。

「西大路さんって色白で肌、綺麗だよね」

珠美は感想を述べるも、西大路の傲慢そうな感じが苦手だった。あの垂れ気味の目に見つめられ

ると、小馬鹿にされた気分になる。女性のように美しい唇にも、嘲笑されているようである。

西大路はいつもモード系高級ブランドのオーダーメイドスーツをパリッと着こなし、ブラウンの髪を奇抜な七三に梳いていた。

「うっはーすごい。見てよ、あの西大路の勝ち組オーラ。後光が差してるわ」

リカは皮肉たっぷりに言う。

「う、うん」

「仕事の出来と人格って、イコールじゃないのね」

リカは頬杖をつきながらこぼした。

「そんなことないよ。比例する人もいるよ」

珠美は伊達に目を遣りながら言った。

伊達さんはやっぱり野性的って言葉が似合うなあ、と珠美はしみじみ思う。彼は一見、冷たい顔立ちで、どこか憂いを帯びている。体格は西大路より一回り大きく、本格的にスポーツをやっていたらしく、鍛え上げられている。足が長いうえに体幹がパーフェクトに作られているので、どんなスーツを着ても洗練されて見えた。

「やっぱり私は伊達さんかなあ……。あの、陰のある感じが素敵だよね」

珠美も頬杖をつき、うっとりした。

「まーねえ……。あの雰囲気はちょっと日本人離れしてるよね。それによく鍛えられて、相当イ体してると思う」

リカはそう評する。

月花の若手トッププレイヤーはと問われれば、誰もが伊達俊成と答える。伊達は世界各国に眠る金属資源の採掘権を獲得し、輸出入のルートを確保し、需要元に供給する、という一連の取り引きを担っている。仕事振りは正確で緻密、専門性の高い知識を有し、各国の言葉をネイティブ並みに操り、泥臭い交渉も粘り強く続けて必ず成約を勝ち取る。また、利益重視をよしとせず、クライアントの、果てはその国の利益となるようなアイデアを次々に提案しているそう、コンサルティング能力の高さも評価されていた。その誠実な人柄で、国内外より人望を集めつつあるらしい。

「月花の鉄鉱石って他社を圧倒してるもんね。全社利益の三十パーセントって言われてんだよ、鉄鉱石の貢献額って。繊維が八パーだから、やっぱすごいよね」

リカは、ストローをもてあそびながら言った。

「ああ、カッコイイなあ！ 伊達さんのあの、名実ともに若手ナンバーワンプレイヤーって感じ」

「あたし思うんだけどさー、西大路ってすごい軽いじゃん？ ふわっふわじゃん？ 女と見れば誰彼構わず口説くし」

「う、うん」

私は口説かれたことなんてないんだけどな、と思いつつ珠美はうなづく。

「そんでさ、伊達ってアタマ固いじゃん？ カッチカチじゃん？ 一ミリもジョークが通じないっつーか。女関係の噂も一切ないし」

「まあ。ふざけたことが嫌いな人なんだと思うけど……」

「それってさ……繊維と鉄鉱石みたいだと思わない？」

リカは笑いが堪えられない様子で、こう続けた。

「ふわっふわの繊維の西大路に、カッチカチの鉄鉱石の伊達とか。マジうけるー！」

リカの大きな笑い声が、フロア中に響く。周りの社員たちが、なにごとかと顔を上げた。伊達と西大路も、こちらを見ている。

「ちよっ、ちよっ、リカちゃん！ まずいつて！」

しかしリカは「今、初めて気づいたー！ ウケるー！」と言いながら爆笑している。そうこうしているうちに、西大路が大腿で近づいてきた。珠美は申し訳ない気持ちになりながら、西大路を見上げる。

「一条さん、楽しそうだね」

西大路は、ニコリともせず言った。

「あははっ、あはっあはっ……！ あー、お腹イタイ。西大路さん見てたら笑い止まなくなっちゃって」

リカは涙を拭いながら言う。

西大路は軽蔑したような目で、口角を上げ「で、今週末は大丈夫なの？」と尋ねた。

「もちろん」

と、リカはうなづく。

「小椋さんは？」



「あ、はい。一応、空けてあります」と、珠美は答えた。

実は、今週の金曜日にリカと西大路が幹事の合コンが予定されている。珠美はそういうのが苦手なもの、リカになかば強引に誘われ、メンバーに入れられてしまった。いつも、リカに対しては強くNOと言えない珠美なのだった。

「小椋さんは、必ず来てよ。君だけにはどうしても来てほしいんだ。じゃないと、意味がない」  
西大路の言葉に、珠美は「えっ」と目を丸くした。

——なんでそんなこと言うんだろ？　こんなことを言われるほど彼と仲よくもない……というか、西大路さんはリカちゃんとは話すけど、私には全然興味なさそうだから。

「絶対、来てくれるね？　約束してほしいんだ。必ず来るって」

妙に真剣な顔で、西大路は念を押す。彼からは、甘ったるい香水の匂いがした。

「は、はい。そこまでおっしゃるなら、行きます。必ず」

真意はわからないまま、珠美は答えていた。

「よかった。安心した」

そう言つて西大路は悠然と微笑み、伊達がいるテーブルへ戻つていった。伊達はこちらを見向きもせず、もくもくと食べている。また伊達に存在を無視された気がして、珠美は胸に痛みを覚えた。

「……ちよつと、今のなんなの？　意味深じゃない？」

リカが顔を寄せて言う。

「あ、うん。そうだね。なんなんだろう？」

珠美は首をひねった。

「またアイツ、なにか企んでるのかしら？」

「さあ。リカちゃんのが仲いいでしょ、私にはわからないよお」

リカの視線の先には、向かい合つて座る西大路と伊達がいる。西大路があれこれしゃべっているのに、伊達はひたすらオムライスを見つめて食べている。しばらくすると、西大路が面白いことを言ったのか、伊達が顔を上げ、おかしそうに微笑んだ。

珠美は、はっと胸をつかれた。

その笑顔がとても柔らかく、優しそうで。普段の不機嫌な仮面が剥がれ、彼の素顔が見えたよ  
うで。

あんな風に笑うんだと、なぜか泣き出したくなる。きっと、私には見せてくれない笑顔なんだ、  
一生。

そのとき、ふと、伊達がこちらを見た。

目が合うと、視線の強さに、ドキリとする。

……………あ。

伊達は怒つたような、険しい表情でまっすぐ睨んでいる。間違いない。伊達はリカではなく、珠  
美だけを見ていた。

珠美は悲しいような、不思議な気持ちで見返す。そんな顔をされる理由が、本当にわからない。

どうして、自分だけが嫌われているのか。どうして、そんな風に憎悪を向けられるのか。  
……どうして？

珠美がしばらく見つめていると、伊達はフイツと視線を逸らし、立ち上がってカフェテリアを出ていく。珠美は呆然と、広い背中を見送った。

——どうしてなの？ 私、なにかした？  
壊れたプログラムみたいに、思いはループし続ける。答えの出ないまま……

◇ ◇ ◇

そして迎えた金曜日。珠美はスマートフォンを取り出し、SNSの画面を開いた。

リカぼよ…というわけで、今夜はよろしくね！

小椋珠美…了解！ けど私、合コン慣れてないけど、大丈夫かなあ？

リカぼよ…大丈夫大丈夫。珠美は座ってニコニコして呑んでるだけでいいから♪

小椋珠美…OK！

リカぼよ…場所は渋谷の『カナパティ・サムサラ』で二十一時スタートだからよろしく！

——わーん。場所全然わかんないよー！

リカから届いたSNSのメッセージを眺め、心の中で絶叫する。

全身めかし込んだ珠美は、渋谷の街を早足で歩いてきた。気合を入れて履いてきた七センチヒールのせいで、足が痛い。

スマートフォンに表示させた地図を確認する。

もう近くにいるはずなんだけど……

地図を読むのが苦手な珠美は、完全に迷っていた。店の近くに、目印になるものはなにもない。約束の二十一時は、もう五分ほど過ぎてている。大通りから外れたこの辺りは寂しく、雑居ビルやホテルばかりで、シンとしていた。二月のこの時期、夜はひどく冷え込む。

珠美は不意に、だらりと両腕を垂らし、がっくりうなだれた。

……私、なにやってんだろ？

今年でもう二十五歳になるのに。ハケンなんて不安定な身分で、毎日毎日仕事して家に帰るだけの日々。貯金もない。彼氏もない。スキルも資格もない。私と同年で成功してる人はいっぱいいる。結婚して子供産んでる人もいっぱいいる。なのに私は夢も希望もやりたいこともなにもない。しかも処女だし。好きな人には嫌われてるし。状況はかなりひどい。

本当は、合コンなんて行きたくないのにな……

出会いの場に行かないや恋は始まらない、とリカは言う。それはそうだと思う。けど、やっぱり苦手だった。合コンで出会う男の子たちは皆ガツガツしているし、そうじゃなくてもノリがよくて軽くて……とてもじゃないけど、あの場からなにかが始まるなんて、想像がつかない。自分が不器

用なんだと思うものの、うまくついていけない。

——なにかもが虚しく映る。仕事も合コンも恋愛も勉強も、やることなすことすべてが。それらは、私たちが本当に求めているけど得られない、なにものかの代わりに過ぎないように思う。

けど、本物を掴むことはできない。それどころか、その正体を知ることもない。

だから、代用で済ますしかない。なにかも偽りだと薄々知りながら。そのことについて誰にも言えないまま。

体の芯まで冷え込んだ気分で、夜空を見上げた。ビルとビルの隙間に、ぼっかり白い月が浮かんでいる。

——このままで、いいんだろうか？

そんな疑問は、何気ない瞬間に去来する。駅のホームで電車を待っているときや、夜道の街路灯に照らされた、自らの影を見たときに。私はとてつもない大事なものを見落としているんじゃないか。今すぐそれを探しに行くべきなんじゃないか。

だけど、それは実体のない幽霊のように通り過ぎ、珠美もすぐに焦っていた気持ちを忘れ去ってしまう。変わりない退屈な毎日がまた始まり、あつという間に日常に埋没してゆく。

それでも、私たちはきつといつか、何者かになれるんじゃないかと希望を抱く。だから、生きていける。

それはたとえて言うなら、蝶の生態に似ている。卵から生まれた芋虫はやがて蝶になる。そういう変体が、自分の身に起こることを人は期待している。だけど人間の中には、蝶にもなれず、サナ

ギになる方法さえわからず、芋虫のまま一生を終える者もいる。

本物の蝶はいい。彼らは本能的に蝶になる方法を知っている。けど、私たち人間は知らない。誰も教えてくれない。だからずっと芋虫のままということも有り得るのだ。

私、このまま、死ぬまで「芋虫のまま」なのかな？

そこまで考えて、小さく首を横に振った。

やめよう。

きつと、考えてもしようがないことなんだ。こんなこと。

さあ、約束した合コンに行こう。リカちゃんにならってニコニコお酒を呑んで、晩御飯をしっかりと食べよう。もしかしたら素敵な出会いがあるかもしれないし？ それで家に帰った後はドラマの続きでも見よう。明日は早く起きて洗濯して掃除して……そうやって小さな目標を達成していけば、きつとうまくいくよね？ たぶん。

よしつと気合いを入れ直し、足を踏み出した。

そのとき。

「つーかまーえたー！」

異様に明るい声とともに、いきなりうしろから羽交い締めにされた。

うわっ……なっ、なに!?

珠美はジタバタもがいた。しかし背後から回された両腕は頑丈で、びくともしない。

「確保ーっ！ 確保ーっ！」

でかい声が路地に響き渡る。五人の男がゲラゲラ笑う。

「やだっ……ちよっと！ 離してくださいっ！」

「おーよしよし。ジタバタしないのお〜」

一人の男が野卑な声でささやくと、さらに周囲の笑い声が高くなる。すると、四人の男たちがふらふら歩いてきて、珠美の眼前に立った。

……まずい。

珠美は一瞬で状況を悟り、恐怖に凍りつく。

男たちはまだ若かった。二十歳になってるかも怪しい。若者特有の鬱憤を溜め込んだ表情に、正体不明の苛立ちで目はギラギラしていた。一人は坊主頭、一人は白に近い金髪、一人は奇抜なモヒカンで、最後の少し年配の男は長髪で、鼻と唇に鋷のようなピアスをしていた。羽交い締めしている男の顔は見えないが、かなり屈強な体をしている。

「おい、車回して来いよ」

「いや、無理。ここイッツウだし」

「知るかよ。いいよ、車を突っ込め」

「やっやめてっ……！！ うぐう」

「お姉さん、静かにね？」

——嘘でしょーっっ!?

口を塞がれた珠美は心の中で絶叫した。まさか街中で、こんな人さらいまがいのことが起こると

は！ 油断してた。こんな夜更けにミニスカートで独りふらふら歩くなんて。平和ボケしていた自分を呪う。けど、もう遅い。

珠美は全力で抵抗した。拘束されている両腕は動かせず、懸命に足をばたつかせた。膝を上げ、鋭いヒールで男の足を踏み抜こうとした。しかし、別の男に横から足を絡められ、思うように身動きが取れない。

「大人しく、しろよ」

金髪の男はふらつきながら言った。

なんだか変だ。全員、ひどく酔っぱらっているのにアルコールの臭いがしない。なんなんだろう、この異様なテンション。すごく変な酔い方だ。

……クスリでもやってるの？

思い当たって、さらに絶望的な気分になる。そんな状態の男たちに説得なんて絶対無理だ。

「早く持つてっちゃんおうぜ」

「車、すぐそこだし」

男たちは暴れる珠美を押さえ込んで、引きずりながら移動し始めた。

珠美は懸命に頭を回転させる。どうしよう？ どうする？ とにかく隙を見つけて、どうにかしなきゃ！ 助けを求めたいのに、辺りは腹が立つぐらい静まりかえっている。

「ガムテ、持つてきた？」

「あるある」

「第一発見者の俺が最初な」

珠美は一気に血の気が引いた。

嘘でしょ？ 私、処女なのにな？ 初めてがこんな男たちと……………

絶対嫌——————！！

珠美は口を塞いでいる男の指を思いっきり噛んだ。骨まで折ってやる勢いで噛んだ。顎が砕けても良いと思った。

「ぐわあっ！ 痛えつつつつ！！」

男が手を放し、一瞬、自由になる。珠美はそのまま駆け出そうとした。しかし、すぐに腕を掴まれ、引きずり倒される。尾髄骨をコンクリートに打ちつけ、パンプスが脱げた。

「テメーぶつ殺すぞつつ！！」

男の怒号が夜気を切り裂く。

珠美はとっさに頭をかばった。

……神様っ！！

次の瞬間。

突然、目の前の男が横ざまに、三メートルほど吹っ飛んだ。

「えっ？」

珠美は目を丸くする。

男は自動販売機に腰から激突し、隣にあつたゴミ箱が勢いよく倒れた。蓋が外れ、けたたましい

音を立てて、空き缶が転がる。

一瞬の出来事で、なにが起こったのかわからず、その場にいた全員が硬直する。

恐る恐る見上げると、珠美の前に真っ黒で巨大な影が立ちほだかっている。その影は男たちより、ひと回りもふた回りも大きかった。街路灯が逆光になり、顔はよく見えない。

……ヒ、ヒーロー!?

脳裏を、特撮映画のアクションシーンがよぎる。

フリーズしていた男たちが動き出す。

「舐めてんじゃねえぞ！ ゴルアアアアッ！！」

激昂したモヒカンが、右ストレートを繰り出す。長身の影は、ゆらりと体を斜めにしてかわし、モヒカンの左肩を、がしっと掴んだ。その後、一瞬、長身の男が微かに笑うのが見えた。真っ白に輝く歯がこぼれるのが。

次の瞬間、長身の男は至近距離から、強烈なボディブローを叩き込んでいた。強力な拳がモヒカンのみぞおちに刺さり、背中まで貫通する勢いでめり込む。素人の珠美でもわかるほど、激烈な一撃だった。

——プロボクサー級かも。

モヒカンの体がくの字に曲がり、口から唾液と吐瀉物が落ちる。長身の男は拳をみぞおちに入れてたまま、反対の手でなだめるように、モヒカンの背中をトントンさせる。その余裕が逆に怖いと、珠美は思った。モヒカンははずると、膝から崩れ落ちる。気絶したのかもしれない。

次の瞬間、坊主と金髪が早足で長身の男との間合いを詰め、同時に襲い掛かる。素早く身を翻し長身の影を、街路灯が照らす。

このとき、珠美は初めてその正体に気づいた。

——だ、伊達さんっ!?

見間違いかと思ったが、そうじゃない。フード付きの黒いモッズコートを羽織った、伊達俊成だった。頼もしい身のこなしは、目眩がするほどカッコイイ。

伊達は殴りかかってきた金髪を、流れるような所作で避ける。すると、反対から飛んできた坊主頭のアップパーカットが、伊達の顎にクリーンヒットした。けど、珠美の目には伊達が、わざと殴られたように映った。

伊達はゆっくり首を横へひねり、ペッと唾を吐いた。街路灯が逆光となり、精悍な横顔に影が差す。

はっと、珠美は息を呑んだ。

伊達は少し首を傾げて目を細め、微かに口角を上げた。

その一瞬、今いる状況をすべて忘れた。完全に心を奪われていた。伊達の表情が、ひどく艶めかしく、胸に迫ってきて。映画のスクリーンに大写しになった、ヒーローみたいで。

珠美ははまだ立ち上がることができず、その場で乾いた唇を舐める。

いきなり伊達が、目にも留まらぬ速さで、鋭い左ストレートを繰り出した。コートの裾が死神のマントみたいに、翻る。男たちとは、明らかにスピードが段違いだ。拳がどこに当たったのか目

視できないまま、坊主頭の首が不自然にねじれ、吹っ飛ぶ。

珠美は座り込んで口を開けたまま、坊主頭が道路に転がるのを見つめた。

そのまま伊達は振り向かず、電光石火の裏拳で、背後の金髪を殴りつけた。まるで頭のうしろに目がついているみたいに正確なパンチだった。パシッと乾いた音が響き、血液らしき液体が飛び散り、金髪は仰け反って尻もちをつく。気づくと、長髪の男以外の全員が、アスファルトに転がっていた。ほんの一瞬の出来事だ。

——えええ、強すぎる。

一目瞭然だった。若者たちとは体の構造が、鍛え方が全然違う。

残りは長髪の男一人。伊達が乱れたコートの襟を直しながら振り返ると、長髪男は「お、覚えてるよ!」と言いながら、大通りへ向かって駆け出した。その後を、バラバラと倒れていた男たちがついていく。

伊達は小さく笑って「覚えてるよなんて、今どきB級映画でも言うかよ」とつぶやいた。気づくと、暗い路地には伊達と珠美の二人だけだ。

伊達がこちらに向き直り、おもむろに腕を伸ばす。

……殴られるっ!

なぜか珠美はそう思い、恐怖で身を硬くした。

「大丈夫?」

柔らかく響く、低い美声。

「あ……………」

見ると、伊達は珠美を助け起こそうと、手を差し伸べている。珠美はとっさに手を取って、立ち上がった。大きくて温かい手だ。優しく、安心できる。

「あっあっ……あのっ」

珠美は言葉に詰まった。よかったという安堵と、今さらながら恐ろしくなったことから、ポロポロ涙が出る。

「あっ……ありがとうございます」

珠美はようやくそれだけ言った。

泣くつもりなんてないのに。

いつも以上に、どもっちゃって恥ずかしい。

嫌われているのに助けてもらって、申し訳ない。

さまざまな思いが頭をよぎり、涙が激流のように押し寄せてくる。珠美は伊達の手を握りしめたまま、しゃくり上げた。こんな風に泣くべきじゃない……頭はひどく冷えているのに、勝手に涙が溢れてくる。

——こんな瞬間、思う。

私の中にはこれが私だと思ってる表面上の自分と、そうじゃない奥底の自分があるのかなって。

冷えた私と、熱い私と。

いつもモノを考えて決めているのは表面の冷えた私。けど時折、こうして奥底の熱い私がある存

在を主張する。

伊達は、慰めるでもなく、声を掛けるでもなく、ただ黙って立っていた。手を振り払わないでいてくれて、ありがたかった。いつもなら「邪魔だ」と怒鳴ってもおかしくないのに。

心の奥底にいる彼は優しいのかな、と珠美は思う。

なにもしないで立ってるだけで「優しい」ってのも変だけど。けど、嫌ってるのに助けってくれた。きつと、放つとけなかつたんだ。

仕事でも、他の社員が困っていると、伊達がり気なく助けていることに、珠美は気づいていた。トラブルが起きれば、彼の担当じゃなくても、必要な人員を集めたり助言をしたりする。彼は仕事を振るにしても、メール一本書くにしても、相手の負担が増えないよう、最大の注意を払っていた。いつだったか珠美が、翌朝までに必要なファイルを誤って削除してしまい、作り直しをしたときも、伊達は一緒に残業して手伝ってくれた。めっちゃくちゃ怒りながらだけど。

——伊達さんが、本当は優しいのは知ってたよ。

そう思うと少しうれしくなって、珠美は微笑んだ。それを見た伊達は「大丈夫？」と聞き、珠美は「大丈夫です。ありがとうございます」と答えた。

「伊達さんてなにか、やってたんですか？ その……すごく強いから」

「……ボクシング。ライセンスも持つてるけど、今はやってない」

伊達は、ぼそぼそ答えた。

「なるほど。だからすごいんですね」



プロボクサー！ そりゃ強いはずだわ。男たちとは、明らかに差があったもん。ふと気づくと、伊達の手の甲から血が流れている。

「これ、痛そうですね。大丈夫ですか？」

珠美は落ちていた自分のハンドバッグを拾い上げ、ハンカチを取り出しながら言った。「手加減したつもりだったんだが」

伊達は傷を見て眉をひそめ、こう続けた。

「グローブしてないし。それに本気で殴ると骨が折れる」なるほど。あれで手加減してたんですね。

珠美は内心苦笑いしつつ、ハンカチで傷口を押さえた。

こんな強いサラリーマンがいるなんて、世の中って恐ろしい。伊達さんって何者なんだろう？ 仕事もむちゃくちゃできてイケメンで頭もよくて喧嘩も強いなんて、スーパーヒーローかなにかなの？

「もういいよ」

伊達は嫌そうに、パッと珠美の手を払った。

「あ……。すみません」

また拒絶され、胸に鈍い痛みが走る。

「……これからどうする？ 送って行こうか？ 家まで」

伊達は儀礼的に言った。その声に、特別な感情は感じられない。

珠美は少しがっかりしながら「いえ、これから予定があるんで」と答える。伊達の事務的な態度に、だんだん心が冷えていった。

「帰ったほうが、いいんじゃないか？」

「大丈夫です！」

珠美は少し強めに答えた。伊達は呆気に取られた顔をする。

「君がそこまで言うなら……」

伊達は目の前の雑居ビルを指差し、さらにこう言った。

「行くなら、入り口はここだけだ」

「へ？」

「ガナパティ・サムサラ」

珠美はびつくりして目を見開く。

「なんで知ってるんですか？ 私が探してるお店……」

「俺もメンバーなんだ」

「え？」

「だから……」

伊達は言いにくそうに言葉を続けた。

「今夜の……その、合コンのメンバーに、俺も入ってるんだ」





どうしてこんな展開に。

伊達と連れ立って店に入った珠美は、ワイングラスに唇をつけ、ちらりと彼の様子をうかがう。

伊達は不機嫌そうに生ビールを呑んでいる。

珠美はテーブルの端にいて、伊達はテーブルを挟んで対角線上の端に座っている。

ガナパティ・サムサラは不思議な空間だった。中は薄暗く、それぞれの席が完全な密室で、靴を脱いで上がって、ふわふわした絨毯の掘りごたつ式になっている。クッションがあちこちに置かれていて、なんだか妖しい雰囲気。

この店はちよつと怖いけど、伊達さんと同じテーブルでお酒呑むなんて……！

珠美は浮かれていた。席はものすごく遠いけど。

「それでは、性癖をカムアウトしながらの自己紹介タイム!! イエエア!」

西大路がハイテンションで仕切っている。女性陣がどつと笑う。

「じゃ、僕から。僕は月花商事の西大路頼嗣。アパレル部門。特技は人妻寝取り」

言いながら西大路はキメ顔を作り、こう続けた。

「SとMの両刀使いだから、Sな子もMな子もどっちも愛してる。フェイバリット体位は騎乗位」

やだー! 人妻とかヤバイ! エロい! と言いながら女子が、きゃあきゃあ盛り上がる。

西大路さん、相変わらずスゴいな……

こんなに容姿端麗な男がおどけると、そのギャップも相まってこちらは笑ってしまう。珠美は劇場の客席にいる気分で、彼の見事な進行を見守る。西大路と伊達以外は知らない男たちだ。けど、全員只者じゃないオーラを放っている。

「はーい! 次は僕」

珠美の前に座っている、眼鏡に顎ひげの男が勢よく手を挙げた。もちろん、顔は珠美ではなく美女たちのほうを向いている。

「僕は華井物産の穴戸雄平! 部門は天然ゴムね。ゴム。ゴムって大事だよね……」

下ネタばかり! やめてー! と言いながらも、女性陣はニコニコ楽しそうだ。テーブルには五対五で男女交互に座っていて、男性陣もさることながら女性陣も華やかだ。リカの友達の元モデルと、地方局アナウンサーまでいる。皆、一様にはっとするほどの美女で、四大卒でミスコン常連で育ちのよいお嬢様。どの女性も、容姿も境遇も珠美とは格が違う。

——こういう場に来るには、本来なら資格がいるのだ。

どことなく白けた気分で、珠美はワインを啜る。

いつもこうだ。所詮、私は人数合わせで呼ばれただけ。

珠美は短大卒で、どちらかと言えば貧乏な家庭で育った。容姿だって不細工じゃないけど美人でもない。リカはああ見えて、タレント事務所所に所属していた過去があるし、実家は都内でも有数の資産家だ。商社勤務はお遊びのようなもの。

要は住む世界が違うんだよね、と珠美は思う。彼女たちと美やステータスを競おうとは思わないけど、なにも感じないほど鈍感じゃない。華やかな世界に憧れがないと言ったら、嘘になる。これは嫉妬だつてわかっているけれど。

女の子たちも含め、順番にソツなく自己紹介をこなしてゆく。伊達の番になり、珠美は少し緊張して座り直した。

伊達はおもむろに話し始める。

「あー……月花の伊達です。主に鉄鉱石の取引を。西大路とは同期で……。今夜は楽しみますんで、よろしく」

声もとびつきりカッコイイ。女性陣も一様に『きゃ〜カッコイイ』という眼差しに変わる。

「性癖は？ 言えよ」

西大路がニヤニヤしながら煽る。

「性癖？ あー……」

伊達は目つきをガリリと変え、その効果を試すように、セクシーに微笑む。そして、こう言った。「巨乳愛好家。カップはEかFがベスト」

きゃーつやダー！ と女性陣の歓声上がる。マジですか、と珠美は驚きの目で伊達を見た。

普段の真面目な彼からは、そんなこと言うなんて想像つかない。伊達さんってちゃんと、その場に合わせて冗談を言うんだ。

それに、Eカップですって？ こつそり自分の胸を見下ろす。その点においてなら、私も条件を

満たしてるかも？

「じゃ、次。タマちゃんどうぞ」

西大路が唐突に振ってきた。しかもいきなり呼び方も変わっている。

——わ、私!?

ドキリとして辺りを見回すと、全員の視線が珠美に集まっている。伊達も含めて。

ど、どうしよう?? えーつと、なにするんだっけ? そうだ、自己紹介……

「あっあの……えーつと、小椋珠美、です」

自分でもおかしいぐらい、キョドってしまう。それでもどうにか言葉が続けた。

「月花商事で派遣社員やっています。今は鉄鉱石資源部所属です。よろしく願います……」

「性癖もお願ひしまーす!」

正面の席の穴戸が楽しそうに声を上げる。

「せつ性癖!？」

どうしよう? 処女なのに性癖もなにもないよ! 他の女の子はなんて言ってたんだっけ……

伊達の顔ばかり見ている、なに一つ聞いていなかった。

「ダメだよ、タマちゃん。逃がさないよ。せ・い・へ・き♪」

西大路が意地悪く笑う。

「性癖は、性癖は……」

変な汗で、ニツトがべつとり背中に張りつく。

なんでもいい。とにかくなにか言わなきゃ。

「性病は、処女です」

この一言で、場がブリザード級に凍てついた。

そして、長い沈黙が下りる。

皆、シヨジヨ？ と首を傾げ、珍種の動物でも見る顔をしている。

——ああああああもおおおお死にたいいいい………

今すぐこの場を飛び出したい衝動にかられた。完全負け戦の合コンだわ、来るときに変な輩に襲われるわ、好きな人の前で処女だと露見するわで、今すぐ消えてなくなりたい。お母さん、帰りたい。

大量の矢が飛んできて、脳天にブスブス刺さった気分。落武者の心地で、がつくりとうなだれた。凍りついて固まっていたメンバーの中で、立ち直りがもつとも早かったのは、さすがの西大路だ。驚愕に上げた眉をさつと戻し、いつもの笑みを浮かべ「タマちゃんはピュアで貴重なんだから、おまえら簡単に持ち帰るなよ」と男性陣に言った。

「そうよー。やめてくださいよー、珠美はプレミアなんだから」

リカがすかさずフォロースる。

その言葉を皮切りに場の盛り上がりに戻り、珠美はほつと胸を撫で下ろした。

——西大路さんとリカちゃんにフォロースしてもらって、情けない……。でも、よくよく考えたら、なんで私がほつとしなきゃいけないんだろ？ 処女のなが悪いの？ 真実より、場の盛り上がり

が大事なわけ？ おかしくない？ と、心の中で吼えてみても虚しい。

そこからの商社マンたちは、スイッチが入ったようだった。

伊達も、西大路と組んで巧みな話術を繰り出し、笑いは取るわ酒はガンガン呑むわで、場は大いに盛り上がった。珠美はすっかり度肝を抜かれてしまった。

——すごい。

超絶イケメンコンビが本気を出すと、場がものすごいことになる。しかも伊達と西大路の場合、徹底的にやる。その日聞いた二人の話によると、接待では平気で全裸になったり天井から吊るされたり、とても口では言えないことをするらしい。総合商社の営業は非常識なんて言葉が霞むほど、珠美にとって信じられないことの連続だった。徹底的にタフに、クレバーに、そして道化になれないと務まらないようだ。

一つの熟練されたショーを見ているみたいだった。

会話のキャッチボールのスピードが半端ない。頭の回転が尋常じゃない。振りも、返しも、素人には、とてもついていけない。出してくるネタは時事問題が絡んでいたり、流行の最先端だったり、ちよっぴりセクシーだったり、エンタメ性に満ち溢れている。彼らは生き生きと笑い、エネルギーッシュにおどけ、抜群のトークで魅了した。

これが商社マンなのかあ。

珠美は終始、圧倒されっぱなしだった。

「ねえ、タマちゃん」

見ると、いつの間にか隣に座った西大路が、シャンパンをグラスに注いでいる。

「僕さ、伊達とは古い付き合いなんだよね。だから奴のこと、よく知ってるの」

「らしいですね。リカちゃんから聞きました」

答えつつも、珠美は落ち着かない。

この人、ちよつと苦手なんだよね……。さっきまでモデルの子とイチャイチャしてたのに、どうしてこっちに來たんだろ？

「実はさ……伊達にさ、ものすごい秘密があるんだけど、知りたい？」

「えっ？」

西大路は唇を寄せ、耳元でこうささやいた。

「僕にキスしてくれたら、教えてあげてもいいよ」

珠美は飛び上がった。

なんですって!? キス?? とんでもない!

「ほら、早く。伊達に興味あるんでしょ? 唇にキスはハードル高いなら、頬でもいいよ」

西大路は至近距離で、意地悪く微笑む。

伊達さんの秘密……知りたい。知りたくないわけじゃない。でも……

「あ、えと……え、遠慮しておきます」

西大路は驚いて、身を引いた。

「そんなに僕が嫌？」

「あ、いえ。西大路さんが嫌とかそういう問題ではなく。その、伊達さんの秘密は、きつと伊達さんが誰にも知られたくないと思うから」

「ソレ、本気で言ってるの? かわいこぶってるの?」

「そういうわけでは。私も人に知られたくない秘密とか、ありますし……」

「ふーん」

西大路はつまらなそうに頬杖をつく。珠美はそれを横目に、シャンパンを一口呑んだ。たぶんこのシャンパンも超高級なんだよなあ、とボトルのラベルを眺めつつ思う。

虚ろな気分で、グラスを見つめた。

「いいよねえ。タマちゃんの、その表情」

隣の西大路がつぶやく。

「え？」

「僕は無性にうれしいんだ。君みたいな純粋なタイプが、夜の王国に堕ちてくると」

「夜の王国?」

「そう。つまり、こういう世界のこと。夜の王国は、なにもかも二元的なんだ。成功と失敗、勝ち組と負け組、美しさと醜さ、金持ちと貧乏、善人と悪人、男と女……」

西大路はシャンパングラスを片手に、芝居がかった様子で個室のフロアを見渡し、こう続ける。「すべて二元的で、それしかない。実にシンプルだと思わない?」

珠美もつられてフロアを見回す。合コンのメンバーたちは、いつの間にか二人組のカップルにな

り、ひそひそと会話を交わしていた。

西大路さん、ちょっと酔ってるのかな、と珠美は思う。

「ただ、いつまでも夜の住人をやっているのは、少々疲れる。僕も、もう二十九だからね。合コンで馬鹿騒ぎなんて、そろそろ卒業だ」

「そうなんですか」

「そうなんですよ。今いるレールの上を走り続けるには、それだと都合が悪いからね。僕はレールに乗った、成功の人生を歩むんだ」

その言葉に違和感を覚え、珠美は眉根を寄せた。

西大路はそれには気づかず、饒舌に語り続ける。

「だから、そろそろ地盤を固めないかね。僕のスペックに群がる、ハイエナみたいな女は御免だ。おっとりした、ピアノの先生みたいなタイプと結婚して、子供作って、タワーマンションに住まなう」

「……なんで、そんなこと、私に言うんですか？」

「なんでだろうね。君がそれをうらやましいと、思っていないからかな」

思ってますよ、と言おうとして、思っていない自分がいることに気づき、珠美は口をつぐむ。

「夜の王国の住人であるのは、今夜で終わり。僕は昼の明るい世界へ、イチ抜けするから」

西大路はにっこり笑って、ポン、と珠美の肩を叩いた。

西大路の笑顔を見つめながら、ある疑問が頭をよぎる。

この人は、そんなに簡単に抜けられるかな？ 夜の王国を。

シャンパンの表面が照明を反射し、シルクの光沢みたくきらめく。グラスの底から泡が一つ一つ上つてゆき、小さな魂みたいに見えた。



さつきは少し、やりすぎただろうか？

伊達俊成は、西大路と組んでひとしきり場を盛り上げた後、誰としゃべるでもなく一人酒を啣った。右手の甲の骨が浮き出た部分を擦る。そこは皮膚が少し裂け、にじんだ血が固まっている。

普段から、厄介事には極力近づかないようにしている。『嫌だなと感じることに近づかない』という実にシンプルなライフハックだ。これを守るだけで、そこそこ幸せな人生が歩める。

——だが、絡まれているのが小椋さんだとわかった瞬間、もう体が勝手に動いていた。しかも、うまく感情のセーブがきかず、ほぼ全力で殴ってしまった。正当防衛とはいえ、彼らには気の毒なことをした。

「それ、痛くないですか？」

小椋珠美が、心配そうに言う。彼女はさつき、西大路に押し出されるようにして隣に座ったのだ。「いや、別に」

なるべく、感情を押し殺して答える。

「でも伊達さん、すごいですね。めちゃくちゃ強いだけじゃなくて、こういう場を盛り上げるのも上手だし」

「誰でもやれるだろ」

「そんなことないです。おかげで、楽しい時間が過ごせましたし。私、実はこういう場所に来るのがすごく苦手で……」

そんなこと、知ってるよ。

伊達は心の中でそう答え、ウイスキーのロックを舐めた。

——ちなみに俺がもっとも苦手なのは小椋さんだ。仕事では、かなりキツく当たっていると思う。というか、彼女に関しては心を鬼にして意図的に攻撃し続けてきた。仕事のためではない。百パーセント私情だと、自分でもわかっている。たぶん、泣かせたのも二回や三回じゃ済まないだろう。なのに、まったくひるむことなく、俺に対して尊敬や好意を露わにして接してくる。

「あの、伊達さんて、合コンとかにもよく来るんですか？」

全然まったく。合コンなんて大嫌いだし、新卒以来、接待以外で参加したことは一切ない。今回は特別だ。

……なんてことを、彼女に言う必要はないだろう。余計なおしゃべりは、身を滅ぼす。

「たまに」

伊達はそれだけ言った。

二人の間に、沈黙が下りる。

他のメンバーたちはそれぞれ二人組になり、お互いの情報交換に余念がない。これからデートするのか、また別の合コンを開くのか、スマートフォンを取り出してはいじくっている。ゴージャスな内装と、妖しい間接照明に照らされた男女のそんな姿は、まるで秘密結社の会合みたいだ。

そんな様子を見ていたら、伊達は周りの喧騒が遠くのような感覚に襲われた。珠美と伊達の二人を、薄い空気の膜が包み、そこだけ外界から遮断されたような。

珠美はきらきらした瞳で、じつとこちらを見上げている。彼女は色素が薄いせいとか、ゴールドに近い褐色の虹彩が、美しい鉱石のように輝いていた。そこには……こちらの思い過ごしでなければ……思慕の情のようなものが、はつきり表れている。

伊達の鼓動が、強く胸を打つ。

こういう澄んだ目をした女の子は苦手だ、と伊達はつくづく思う。

瞬時に、心の深いところまで見透かされる気がする。心の硬い殻の部分に、音もなく浸透してきて、奥の柔らかい部分にそっと触れられる。そんな弱さはひた隠ししてきたのに、なぜか彼女には知られている。こちらは強く、格好良くあろうとするのに、この目を前にすると無防備な丸裸にされた気分になる。

だから、嫌なんだ。

チラリと横目で見ると、彼女は少し目を細めて微笑んだ。柔らかに包んでくれるような眼差しに、またしても鼓動が乱れる。こんなにも優しい瞳で、見つめられたことがなくて。

——彼女がこんな目をするのは、俺に対してだけなのか……？



そんなことを考えていたら、いつの間にか絆創膏を取り出した珠美が、おずおずと伊達の右手に触れる。伊達は飛び上がりそうになった。

「後でちゃんと消毒したほうがいいと思いますけど……」

そう言いながら、珠美は手際よく絆創膏を貼りつけた。伊達は、その手をうまく振り払えないまま、身を硬くしていた。

手の甲に触れた、つるりとした指先の質感が妙にクリアで、伊達は唾を呑む。視線を落とすとテーブルの下にある、ミニスカートから伸びた太腿が目に入った。パツと目を引くほど白く、見るからにすべすべしていて、触り心地がよさそうだ。

今夜の珠美はピンク色の薄いニットを着ていて、ボディラインが傍目からもよくわかった。腰も肩も細く華奢な印象なのに、バストはボリュームがある。美しい鎖骨からつんと突き出たバストが大胆にニットを押し上げている。ドキドキするような柔らかい曲線を、つい視線でなぞってしまい、伊達は慌てて目を逸らした。

臍の下が、疼くような感じがする。

少し、酔ったみたいだ。

それだけでなくも今夜の彼女はいつも唇は赤いし、まつ毛に色気があるし、なるべく近づぎたくなかった。女を感じさせるときに接近するのは危険だ。

それでも、彼女の気配をすぐ傍に感じているのは、そこまで悪い気分じゃない。手の甲と指先の皮膚が触れ合う感触は、心地よい刺激だ。伊達はウィスキーを一口呑み、ひたすら自分の心臓がポ

ンプみたく血液を送る音に、耳を澄ませていた。

「ご、ごめんなさい。勝手に手を触ったりして……」

石像のように動かない伊達を見て、珠美が消え入りそうな声で言った。

「嫌ですよ、私に触られたり、話しかけられたりするの」

「悪いけど」

今の俺には余計なおしゃべりをする余裕が一ミリもないんだ、と続く言葉は呑み込む。

珠美は端的な伊達の言葉に傷ついた顔をした。しかし伊達はそれ以上なにも言えず、耳の奥の心音に意識を集中する。心のどこかで、珠美をうらやましく思った。尊敬や好意や、傷ついた気持ちさえも、そんな風に素直に表現できる彼女を。

珠美がパツと手を引つ込め、触れていた指先が離れた。それをひどく寂しく思う自分に、伊達は戸惑う。

もう一度、彼女の手に触れたい衝動に駆られた。

そのとき。

「はいはい！ お楽しみのところ、ごめんねー！ そろそろお開きにしましょー！」

西大路が言いながら、伊達と珠美の間を裂くように、なだれ込んできた。

「はい、じゃあ、男性陣は女性陣を送って行ってね。伊達っ！ おまえはタマちゃんをお送りしろ！」

「西大路さん！ そんな、私は……」

珠美が体を斜めにして西大路の体を避けつつ、目を丸くする。

「大丈夫大丈夫。タマちゃんは、なんも気にしなくていいから。伊達ね、コイツ、酒に強いのもすごく、強いのも。むちゃくちゃ強い僕でさえ、酒の強さだけは、こいつに敵わない」

「らしいですね。噂では、聞いたことありますけど……」

「スピリッツのボトルをストリートで空けても、ケロツとしてさっさと帰り、翌日朝イチの便に搭乗して、その足で余裕で商談まとめてくる、そういう男だ」

「頼嗣、酔ってんのか？」

伊達が言うと、西大路はニシシと笑い、こう言った。

「おまえは、僕に感謝しろよ？ ほら、さっさと帰るぞ。二人とも、立って立って」  
まったく。余計なこと言ったら、一発ブン殴るぞ。

伊達は内心舌打ちしながら、立ち上がった。

◇ ◇ ◇

伊達と、読者モデルの杏奈とともに、珠美はタクシーに乗り込んだ。タクシーの後部座席には奥から、杏奈、伊達、珠美の順番で座っている。すると、両腕で二人の女の子の肩を抱きながら道に立つ西大路が言った。

「じゃ、伊達、責任持って二人を送れよ？ 特にタマちゃんは特別天然記念物で、超希少種なんだ

からな。地球生態系の未来のためにも、丁寧に送り届けるよ？」

「わかったよ。うるせえな」

タクシーのシートにもたれた伊達は、不機嫌そうに返す。

「タマちゃんは、家どこだっけ？」

西大路は、タクシーの車内に上半身を乗り入れて聞いてきた。

「私は、三軒茶屋のほうで……下馬です」

伊達の隣に座った珠美は答える。

「で、アンナちゃんは？」

西大路が微笑む。

「私も同じ方向、三茶の駅前です♪」

杏奈も微笑み返した。

「わかったから、とつととそこだけよ。車出せないだろうが」  
伊達は声を荒らげた。

それを聞いて西大路はニヤツと笑うと「ちよつとちよつと、タマちゃん」と手招きをした。珠美が「なんですか？」と聞き返すと、こつちへ来いとさらに手招きをする。

ん？ なんだろう……??

少し身を乗り出すと、不意に西大路が顔を寄せてきた。

そして――



あつ、と思ったときにはすでに、西大路にチュツとキスされていた。左頬に、冷たい唇の感触。なっ……なっ……なっ……いきなりなにをするんですか……

西大路は素早く身を引いて歩道に立ち、手を振っている。伊達が忌々しそうに舌打ちすると同時に、タクシーのドアが閉まった。

「三軒茶屋駅前までお願いします」

伊達が言うと、タクシーがゆるやかに動き始めた。

ちよ、ちよとおおおおおおおとおおお!!

珠美は袖で左頬をゴシゴシ拭いた。さらにバツと振り返り、ガラス越しに西大路を睨みつける。……も虚しく、西大路はすでにこちらを見ておらず、二人の女子とともに、繁華街へ消えていくところだった。

「伊達さんって、いつも何時ぐらいまでお仕事されてるんですかあ?」

苛立つ伊達と激怒する珠美を無視し、杏奈がきやぴきやび言った。

声が三オクターブぐらい高いっての! と、内心ツッコまずにはいられない。

杏奈は明らかに伊達狙いで、珠美の存在完全無視で彼を落としかかっている。伊達の太腿を触ったり、しなだれかかったり、媚を売るのが必死だ。伊達は杏奈のほうを見つてもビジネスライクに受け答えしているが、真顔だから本心はわからない。本当は喜んでいられるかもしれない。珠美は横でイライラハラハラしながら、二人のやり取りを見守るしかない。

もうっ! ちよつとぐらい、こっち見てくれたっていいじゃない!!

合コンはさんざんだったし、処女だってバラしちゃったし、西大路にはおちよくられてキスされたし、本当に泣きたかった。

まるで世界中が、私のことを馬鹿にして、嘲笑してるみたい。杏奈ちゃんだって、なによ。初対面で女だからって、そこまで無視することないじゃない。そもそも西大路さんが悪いのよ。この二人と同じタクシーに乗せるなんて、ヒドイ! 伊達さんが私のこと大嫌いな、知ってるくせに。伊達さんも伊達さんだよ。デレデレしちゃってさ。バツカみたい。

思わず、深いため息が出てしまう。

——私、邪魔なんじゃないのかな。もしかしたら伊達さんは、杏奈ちゃんをお持ち帰りしたいのかも。

普段の姿からは想像もつかないほど、合コン慣れしている伊達を見て、ますます距離を感じた。たぶん伊達は、思っているほど真面目でも堅物でもない。職場で見せる姿は一面に過ぎず、珠美は伊達のことをなにも知らないに等しい。合コンの失敗よりもなによりもそのことに、ひどく落ち込んでしまう。

隣に目を遣ると、杏奈は伊達の腕に絡みついて、耳元でささやいている。

珠美は一人することがないので、ぼんやりと合コンのことを思い出していた。

……伊達さんの秘密って、なんだろう?

窓の外を見ると、街路灯が次々とやってきては通り過ぎた。高速道路がずるりとカーブを描いて果てしなく伸びてゆき、彼方には暗闇に沈んだビル群がそびえ立つ。

東京は、とても綺麗だ。

そこにはゴージャスなブランドよりも、高級なダイヤモンドよりも、もっとずっと輝かしいワクワクするなにかが、じつと息を潜めて待っている……そんな気がした。それは高層オフィスビルの一室にあるかもしれない。あるいは、ミステリアスな薄暗いバーに。あるいは、古い雑居ビルの冷えた鋼鉄のドアの向こうに。

私はそこへ行きたいと願う。だけど、行く方法がわからない。チケットなり、鍵なり、資格なりが必要なんだと思う。だけど、持っていない。どこを探していいのかさえわからない。

深い疲労を覚え、シートにもたれたまま脱力した。

今はひどく暗い場所に、独りで座っているように感じられる。

過ぎゆく都会の小さな灯りを、手の届かない場所から眺めているだけ。明るい昼の世界に帰るには、どうすればいいんだろうと考えながら。心のどこかでもう戻れないんじゃないか、と薄々気づきながら。

そのとき。

右手になにかが触れた。

思わず、暗闇で目を見開く。

あ……。これって……………

それに、ぎゅっと右手を握られる。

……え？ これって、伊達さんの……手？

鼓動が、跳ねた。

一気に目が覚める。間違いない。伊達さんの手だ。

な、なんで？ ど……どうして？

伊達のほうを振り向くも、彼は反対側を向いており、表情がわからない。伊達の羽織ったコートの下で、彼の手は珠美の指先を握っていた。

耳の奥で響く脈拍が、どんどん速くなる。

もしかして……伊達さんは私の手をシートベルトのバックルと、間違えてるのかも。

理性が冷静に解説する声を、心臓の音がうるさく掻き消してしまう。声を出すことも呼吸することもままならず、頭に血が上ったまま石像の如く動けなかった。車内が急激に非現実的な空間に変わり、音声は消え失せ、右手のぬくもりだけで心がいつぱいになる。

頭の中の、言葉も消えた。

いつの間にか杏奈の自宅付近に到着していた。タクシートのドアが開き、いったん珠美と伊達が降りて、杏奈がアスファルトに両足を下ろす。

そのとき、杏奈がなにか言って、伊達が首を横に振って答えた。たぶん、珠美を先に帰してあたしは後でいいとか、そう言ったように思う。伊達はそれに対して、もう遅いからとなだめ、タクシード代は俺が払うとかなんとか言っていたような気がする。とにかく頭が真っ白で、うまく状況が把握できなかった。

気づくと、車内で伊達と二人きりになっていた。

広がったコートの下で、ふたたび指先を絡め合う。

ドキドキ心臓の音がうるさい。伊達はシートにもたれたまま物思いに沈んでいる。珠美は姿勢を正し、前方を見つめたまま、微動だにできなかった。

——たぶん、シートベルトと間違えてるんだと思う。絶対そうだってわかってる。だって、私は伊達さんにむちゃくちゃ嫌われてるんだもの。わかってる。わかっているけど、好きな人に手を握られたら……

めちゃくちゃドキドキするよおおおおおおー!!

鼓動が胸を打ち、血液が生々しく体を巡る。

こういうときに限って、馬鹿みたいに渋滞していて、なかなか辿り着けない。

早く着いてほしい。……いや、ずっとこの時間が続けばいい。けど、この時間が続いたら、ほんとに死んじゃうかも。

頭の表面をどうでもいい思考が、ツルツル滑っていく。

不思議な沈黙だった。居心地がよくも悪くもないような。タクシーのウインカーだけがカチ、カチ、と静寂を切り刻む。風船みたくとんどん膨らんでいく期待と、いやいやダメダメ勘違いだという自分自身への警告。ただ一つ確かなのは、このまま彼と二人で薄闇に紛れていたいという想い。なにも考えず、彼の手の熱だけを感じたまま、どこまでも行きたい。

ありったけの勇気を掻き集め、少しだけ手に力を込めた。『これはシートベルトのバックルじゃないんだよ。私の手なんですよ』ということ伝えるために。

すると、伊達は優しく握り返してきた。

——その後のことは、ほとんど覚えていない。

気づくとタクシーは、珠美のアパートの前に横付けされていた。伊達と手を繋いだまま車を降りる。本当はこんなボロアパート、見られたくなかったのに。頭がふわふわして、なにも考えられなかった。

やっと、玄関ドアの前で我に返った。

長身の伊達が珠美を見下ろして立っている。珠美は息を詰めて、美貌の彼を見上げた。彼の眼差しは冷静で、感情が読み取れない。

いつ、手を離れたんだっけ？

うまく思い出せない。

「じゃ、こいで」

伊達は短く言った。声も、気絶するほどカッコイイ。

そのとき、珠美の頭のギアが突然「常識」というモードに入った。

いけない。こんなボサツとしてちゃ。社会人として、ちゃんと御礼を言わなきゃ!

「あつあつあのっ、送って頂いて、ありがとございました」

頭を深々と下げ、さらにこう続けた。

「それに怪我もさせちゃったし……。その、狭くてなにもありませんけど、お茶でも飲んでいきますか？」

どうしよう!? 誘ったはいけど、部屋がひつ散らかつてるよ!! 脱ぎ捨てたダサイパジャマとか、干しっぱなしのブラジャーとか、お気に入りのゆるキャラの巨大ぬいぐるみとか、どうしよう!?

密かに、軽いパニックに陥る。

「いや、いや」

伊達はコートのポケットに両手を突っ込み、なんとなく横を向いて、部屋のドアを眺めた。

——横顔もむちゃくちゃ素敵。至近距離で見ても、胸が高鳴る。鼻が高く、唇は薄くて綺麗で。

ポロアパートの廊下が、やたらキラキラした特別な場所に変わる。これがイケメンオーラのなせる業ってやつかな。

伊達はそれじゃ、と軽く一瞥をくれて歩き去っていく。大きな背中を見送りながら、ファー付きフードのあるコートが、男らしくてすごく似合うな、としみじみ思った。

ただのシンプルな黒のモッズコートなのにあ。伊達さんが着ていると、とても洗練されてる感じ。西大路さんのみたくいかにも高級ブランドって感じじゃないけど、こつちのほうが俄然素敵かも。

伊達は長い足で軽やかに階段を駆け下りると、少し身を屈め停車していたタクシーに戻っていく。珠美は、タクシーが発車して赤いテールランプが見えなくなるまで、自室のある二階から見送った。熱に浮かされたまま、鍵を取り出し、ふと首を傾げる。

——今日は一度も怒られなかったし、むしろ優しくして、手も握ってくれた。……もしかして私、自分で思ってるよりは嫌われてないのかな?



それから二日後の、日曜夜。

珠美は、折れそうになる心を奮い立たせ、スマートフォンにメッセージを入力していた。

時刻は二十一時過ぎ。閑静な住宅街のため、辺りは静まりかえっている。

世田谷区下馬のこのアパートは1Kで八畳しかない。けれど、一人で暮らすには充分だし、珠美は気に入っている。女性限定のアパートだから安心だし、三軒茶屋駅まで自転車です十分ぐらいい、交通の便もいい。三茶のあの、下町っぽい雰囲気も残しつつ、今どきの若者が身を寄せ合って暮らしている空気が、珠美は好きだった。近くのカフェやバーに入ると、アーティストやクリエイター志望の子たちの『いつかデカイことをやってやる!』というエネルギーみたいなものが、渦巻いている。きつと珠美と同じように、地方から上京してきた子も多いだろう。

珠美のアパートの家賃は六万円。生活はギリギリだけど、どうにか自力で生きていける。珠美は概ね、東京での一人暮らしに満足していた。

珠美はいつも家にいるときは、パイル地のパジャマに身を包んでいる。見た目はかなりダサイけど、ふわふわもこもこして着心地は最高だった。

……昨日の夜も、一昨日の夜も、うまく眠れなかった。伊達とのタクシーでの出来事が、気になつて。

リカに金曜夜の顛末を話したところ、リカは鼻息を荒くして『それは伊達に近づく大チャンスだよ!』とアドバイスしてきた。御礼を口実に、彼を食事に誘えども。その助言に対してとてもそんなことできないと、珠美が泣きつくと、リカは冷めた口調でこう言い放ったのだ。

『どうしてもほしいものがあるんなら、時には必要よ。捨て身のチャレンジってやつが』

珠美は深刻な顔で、スマートフォンの小さな液晶画面を見つめる。

メッセージを送るなら今がチャンスだ。御礼を言うなら、あまり遅くなり過ぎたら失礼だし。

伊達も社内のグループSNSに登録しているので、直接連絡先を交換したことがなくともプライベートメッセージが送れるのだった。

小椋珠美…突然のメッセージ失礼致します。

先日助けて頂いた小椋珠美です。その節はありがとうございました。

あと、家まで送ってくださいありがとうございます。

手の怪我は大丈夫でしょうか？

御礼と言ってはなんですが、今度晩御飯でもおごらせてください。

お忙しいとは思いますが、お時間があるときで大丈夫です。

ご恩返しができると思います。返信お待ち申し上げます。

絵文字を入れようかどうか悩むも、伊達さんはそういうのが嫌いかも、と思い直す。何度

も何度も文面を読み直し、誤字脱字のチェックをする。これじゃ少し文章が硬すぎるかも……と思  
い、軽い感じに修正し、やっぱり失礼だなと考え直して、元の文章に戻した。

たかがメッセージ一本打つだけなのに、私、気持ち悪くない？ ストーカーっぽくない？

トホホな気分でうなだれる。きつとり力なら、迷わず十秒で送れるはずだ。

もう一度、文章を読み直す。

さすがにいきなり「好き」とは書けなかった。けど、メッセージを送るだけでも自分的には飛躍  
的進歩だ。

これって、明らかに誘ってるよね？

やっぱ下心、ミエミエかな？ ウザい女って、思われるかも。

頭の中の声が、次々とブレーキを掛ける。そんな無駄なことはやめておけ、と。

うわぁーん、怖くて送れないよ!!

珠美は、部屋の中央に置かれた小さなテーブルに突っ伏す。

……怖い。拒絶されるのが。

スマートフォンを握りしめたまま、身震いした。

本当に、なにをこんなに恐れているんだろう？

膝を抱えたまま顔を上げ、壁時計をぼんやり見つめる。

心底、不思議だった。

伊達さんに拒絶されたからって、死ぬわけでもない、血を流すわけでもない。お腹が減るわけ

じゃないし、貯金が減るわけじゃない。そもそも拒絶とは実体があるものじゃない。人はなぜ、目に見えないお化けみたいなものを、こんなにも恐れるんだろう？

ふと、伊達に手を握られたときの、あの温度を思い出した。

それをはずみに、珠美は無心で送信ボタンを押した。

押ししてしまったから、「ひっ」と小さく声を上げる。慌てて取り消そうとするも、メッセージにはもう「既読」のマークがついている。

この私が、あの伊達さんに、お誘いメッセージを送ってしまった……!?

画面を凝視したまま、石像のように固まった。



メッセージの受信音が鳴り響き、伊達俊成は「おや」と顔を上げた。

寢室兼書斎で資格試験の勉強をしていたら、いつの間にか夜になっていたらしい。時計を見ると、二十一時十五分だった。伊達はテキストを閉じて立ち上がり、スマートフォンを探す。

伊達は、月花が借り上げた独身用のマンションに住んでいた。JR恵比寿駅の西口から歩いて八分ほどの立地で、間取りは2LDK。二十三区内ならどこでもすぐ出られるので大変便利だ。実家も都内なので職場まで余裕で通えたが、三十前の独身男が実家に寄生しているのも気が引けて、一人暮らしを選んだ。

まあ、束の間の仮住まいだな、と伊達は思っている。いずれ海外駐在に飛ばされる身だ。というか、本来ならとっくに駐在に行っているもおかしくない。つい最近、月花は原油価格の大幅な下落を受け、新エネルギー事業から撤退した。実はこのとき、北米にある関連子会社の役員就任の打診を受けていたが、そのゴタゴタで話はなくなり、日本にいる期間が少し延びてしまった。

伊達はまだ東京の本社にいるのには、そんな事情がある。

お目当てのスマートフォンは、ベッドの脇に落ちていた。拾い上げ、SNSの受信ボックスを開く。見ると、小椋珠美からのメッセージだった。

ドキリとして、小さく息を呑む。

なんてことはない。金曜日の御礼のメッセージだ。社会人なら、よくあるやつ。けど、あの夜の親密な空気と、こちらを覗き込む澄んだ瞳が思い出され、落ち着かない気分になる。

合コンなんか行かなければよかった。

苦い後悔が込み上げる。やはり彼女との必要以上の接触は、避けるべきだった。けど、行かなかったらそれはそれで、気になって仕方なかっただろう。いずれにしろ、集中力を欠く状態に陥り、最悪な気分になるのは間違いない。

まったく、忌々しい……

自分を恨むべきか、珠美を恨むべきか、よくわからないまま伊達はリビングまで移動した。もちろん、珠美がなに一つ悪くないのはわかっている。これが八つ当たりだということも。

リビングは十畳ほどの広さで、簡素なソファとテーブルとテレビだけがある。テレビは洋画と証



立ち読みサンプル  
はここまで

券のマーケット情報を観る以外は、使っていない。日本の番組は今ひとつ感性が合わず、ほとんど見なかった。

伊達はソファにどざり、と腰を落として脱力した。反動で、スプリングが少し軋きむ。

小椋さんと、二人つきりで食事か……

口元に、乾かわいた笑みが漏もれる。そんなこと、できるわけじゃないか。まったく、こちらの気も知らないで、能天気な誘いだ。

それでも、喜んでしまっている自分に、ふと気づく。さつきよりなんとなくウキウキして、ニヤニヤが止まらないような。いや、これはなにも特別な感情じゃない。年頃の女性に誘われた一般男性が、一般的に抱く感情だ。

伊達は真顔を作り、浮き足立つ気持ちを抑えつける。

そして、西大路頼嗣が全部悪い、とここで結論づけた。

いつもそうだ。あいつは野生の狐みたく勘が鋭すまじくて、俺の気持ちを察知してからかかってきやがる。とにかく人をおちよくつていないと、気が済まない奴なんだ。あんな奴の思うツボに、はまってたまるか。俺はもう決めたんだ。くだらんことに気を患やぶってないで、仕事に集中しよう。今ほどにかく試験勉強が最優先だ。

伊達はよし、と気合いを入れ、背筋を伸ばす。

だから、とつとと返信してしまおう。どこまでも、ビジネスライクに。



伊達にメッセージを送ってから、五分も経たずに受信音が鳴り、珠美は飛び上がった。はずみでテーブルに膝ひざを強打し、涙目でうずくまる。

……伊達さんから返事が、きた!?

一気に血圧が上昇し、パニックに襲われかける。

あ、ああああどうしよう!? 怒られる? 断られる? キレられる? それとも奇跡が起こって、もしかしたら……OKかも!?

口から心臓が飛び出しそうになりながら、震える手でメッセージを開いた。

伊達俊成…社会人として当然のことをしたまです。

御礼等は一切不要です。

一瞬で、頭がすつと冷却していった。

珠美は立ち上がると、ふらふらとベッドまで歩いて行って、顔面からダイブする。しばらく、そのまま動けなかった。

……素っ気ないなあ……

ショックを通り越して無性に馬鹿馬鹿しくなり、ふふつと自嘲的な笑いが漏もれる。